

現代の女流文学

編集 女流文学者会

2

瀬戸内晴美

吉田知子

安西篤子

河野多恵子

田中阿里子

北畠八穂

森茉莉

編集 女流文学者会

2

瀬戸内晴美

吉田知子

安西篤子

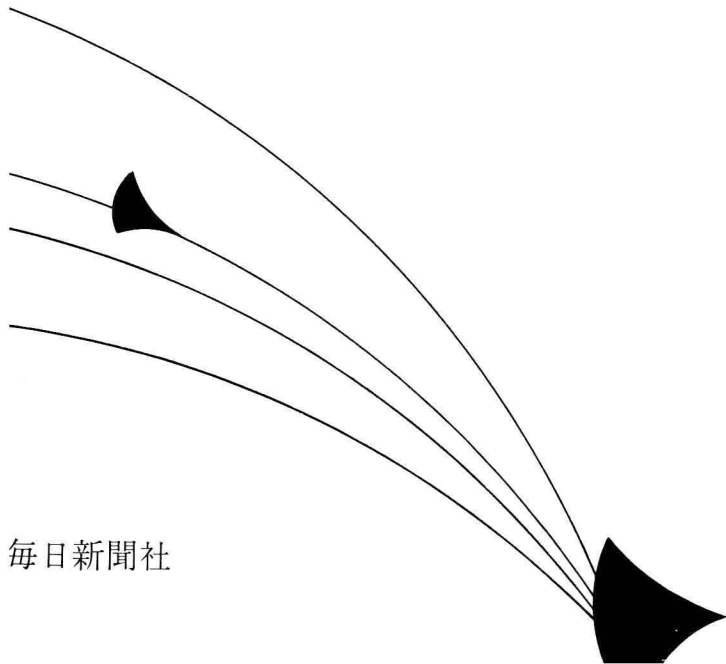
河野多恵子

田中阿里子

北畠八穂

森茉莉

毎日新聞社

An abstract graphic design featuring several thin, curved black lines that originate from a small black teardrop-shaped element on the left and converge towards a larger, more complex black shape on the right. The lines are smooth and elegant, creating a sense of movement and flow.

現代の女流文学 第二卷

定価 一二〇〇円

昭和四十九年八月二十五日 印刷
昭和四十九年九月二十日 発行

編集	女流文学者会
編集	円地文子
委員	佐多稲子

編集人 浜田 琥司
発行人 朝居 正彦
発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上
〒四五〇 名古屋市中村区堀内町
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

図書印刷 大口製本

〈検印省略〉

現代の女流文学
2

目

次

瀬戸内晴美

夏の終り

5

おだやかな部屋

33

吉田知子

無明長夜

121

安西篤子

張少子の話

173

河野多恵子

不意の声

197

田中 阿里子

鱻
285

北 畠 八穂

東宮妃
315

森 茉莉

気違いマリア
345

中村 佐喜子

女流文学者会のあゆみ2
361

川 村 二郎

解説 物語と告白
365

裴 慎
安 東
澄

夏の終り

瀬戸内晴美

瀬戸内晴美

大正一一（一九二二）・五・一五。徳島市に生まれる。東京女子大卒。在学中に結婚。北京に渡ったが敗戦のため帰国、のち離婚。「文学者」同人となり、昭和三〇年、処女作「痛い靴」を発表。小田仁一郎主宰の「Z」に参加、同三二年「女子大生・曲愛玲」が第三回新潮社同人雑誌賞を受ける。同三六年「文学者」に連載した『田村俊子』により第一回田村俊子賞を受賞。同年ソ連を一カ月旅行。同三八年「夏の終り」により第二回女流文学賞受賞。同三九年初めてのヨーロッパ旅行。同四八年、仏門に入る。

その他の著書に『かの子撥乱』（昭40）『美は乱調にあり』（昭41）『鬼の栖』（昭42）『妻と女の間』（昭44）『遠い声』（昭45）『恋川』（昭46）『余白の春』（昭47）『吊橋のある駅』（昭49）などがあり、瀬戸内晴美作品集』全八巻、『瀬戸内晴美長編選集』全二巻も刊行された。

横浜の港には、雨雲が低く垂れこめていた。

風はなく、目に捕えがたいほどの七月の霖雨が、海にも街にも煙っていた。風景はやわらかく滲み、スーラーの絵であった。

ソ連航路のモジャイスキー号は、白い巨きな船腹に朝の雨をしめらせて、ゆったりと南棧橋に入っていく。

一カ月のソビエトの観光旅行から帰ってきた知子は、甲板の手摺に軀を押しつけて身じろぎもしない。切迫した不安と恐怖で心が重苦しく凝っていた。出迎えの人群の中に慎吾の姿が見えなければ、慎吾は死んでいるのだという妄想が、旅が終りに近づくにつれ知子の心の中で影を濃くしていた。

レニングラードの白夜の暁方に見た不吉な悪夢が、ずっと知子の頭に焼きついていて、たいていの夢とは反対に、その夢は日がたつにつれ鮮明度をました。気味の悪いほどのなまなましさで、それは知子を悩ましつづけてきた。

夢の中で、知子は慎吾の妻に慎吾の死を告げられたのだ。

じぶんの泣き声で目をさました時には、頬も枕もぐっしより濡れていた。目がさめてからもしばらく、夢のつづきの泣きじゃくりが止らなかった。

八年間、まだ一度も逢ったことも声を聞いたこともない慎吾の妻は、夢の中では、灰色の地味なスーツを着ていた。タイトのスカートの下できちんと両膝を折りまげて坐っていた。絵でみる幽霊のような角度に顔をうつむかせている。顔のまわりには濃い影が霧のようにたちまよっていた。強いてのぞくとその顔は目も鼻もないのっぺらぼうなのが夢の中の知子にはわかっていて、首筋に束ねた古風な髷にばかり、わざと目を注いでいた。たしか、長い髪はうるさいといって、ショートカットにしたと、いつか慎吾がいていた筈だがなどと、知子はぼんやり考えていた。うつむいたまま、妻は妙に自信にみちた声で切口上にいった。

「小杉は死にました。それで、本の整理をしたいのですが、まとめてあなたにひきとっていただけるかと、うかがったのです」

夢だとわかってからも、知子は慎吾の死を聞かされたショックからすぐにはたちなおれなかった。動悸が激しくうち、脂汗がべっとり滲みでた。

慎吾が死ねば、じぶんはこんなに悲しかったのかと、知子はじぶんの嘆きの深さに掉たれて、あらためて涙がせぐりあげてきた。

暁方の夢は正夢だという迷信が思いだされた。女学生時代、親友が夏休みの間に急死した時、夢でその時刻に知らされた経験が、急になまなましく思いだされてくる。一方、知子を誰よりも可愛がっていた母が防空壕で焼け死んだのを、

北京にいた知子は夢にも知らず、故郷に引揚げざるまで、一年以上も、死んだ母が知子の胸では生きつづけていた事実を思いだして、不吉な前例をあわてて打消そうとしたりした。

カーテンを引くと、外は白夜の真夜中よりいくらか明るさをました夜明けの透明な光がさしそめていた。ホテルの前のイサキエフ寺院の広場の真中のベンチで、恋人どうしが抱きあい身じろぎもせず接吻していた。一番電車を待つ人々が、寺院の前で数人ぼんやりたたずんでいた。

油絵めいたエキゾチックなその風景は、いっそう慎吾とはるかな距離を思わせ、知子の心に不安とおびえをかりたててくる。昨夜は一時すぎまで白夜のネヴァ河でヴァラライカを弾いて踊ったり歌ったりしている若者たちを見て歩き疲れたせいの夢だと、考えようとしてもだめだった。

スプートニクを飛ばしている一方、航空便が二カ月もかかって日本へ着くような奇妙な文明国のソ連内からは、安否のききようもなかった。たとえもし、聞けたとしても、慎吾の妻へ、それができる義理あいの知子の立場でもなかった。

昼間は盛沢山の目まぐるしいスケジュールに追いついてられ、どうにかまぎれていた。ベッドに入る時になると夢の恐怖は毎晩執拗によみがえってくる。

異常なほど、知子とその夢にこだわるのは、日頃の知子と慎吾の結びつきによっていた。

八年間、知子は目を離せば慎吾が死にそうな不安につきまとわれ、その危機感にいつでも脅かされてきたのだ。売れな

い小説を書きつづけ五十歳まで芽も出ない慎吾には、死にたくなる原因がいくつでも取りまいていた。知子の部屋でも何度か自殺しかけた慎吾を、知子は危く発見した。二人が死を計画したこともないではなかった。慎吾を死なせないために、知子は八年間、氣をはりつめて生きてきたような形であった。そのためにも慎吾にはじぶんが必要なのだという気負いもあった。

やがて知子には、罰が当たったのだという考えが、不安のしめくりのように浮んでくるようになった。知子の考えの中では、罰は、慎吾の妻から八年間夫をかすめていたという不徳義に對してではなかった。涼太のことでこの半年余り慎吾を裏切っているということの怖れであった。

解決のつかない不安の中で、いつの間にか、知子は、もしも慎吾が無事に生きて迎えてくれたら、その時こそ慎吾と別れようという飛躍した結論をだしていた。信仰のない知子は、こんな時、やみくもに、神や仏や、ありとあらゆる御利益のありそうな幻影に祈って誓う気持だった。慎吾の妻にさえ誓った。

何か、じぶんの犠牲で、慎吾の命があがなえるなら、一番辛い慎吾と別れることを犠牲に捧げるべきだと知子は考えたのだ。罰の原因に当る涼太と別れることよりも、慎吾と別れることがそれほど辛かったのかと、知子はようやくじぶんの心の本音を探りあてた気がした。すると涼太に對して、裏切っているようならしろめたさど、不憫さがこみあげてきた。

同時にこんな切ない犠牲を強いられるのも涼太のせいではないかという、うらめしさと憎しみもそれからみついてくるのであった。

船が近づくにつれ、南棧橋の倉庫の前に長く並んだ出迎える人群の傘の色が鮮やかになった。向うでも甲板の人影が見えはじめたのか、その色がゆらぎはじめた。

知子はその時、押えきれず、ああと声にだしてしまった。人群の端の方に、傘もささず、真直ぐ突っ立っている慎吾の姿をみとめたのだ。棒のように、目鼻もわからぬ遠さからでも、見なれた紺の背広の慎吾の軀ぐせを、見まちがえる筈はなかった。安堵と、感謝で震えてきた。涙があふれてきたので、あわてて人群から離れた。のび上って手をふると、慎吾より先に横によりそっていたベージュ色の服の人影の方が手をあげてこたえた。涼太にちがいはなかった。出発の時も知子はそうして二人の男に並んで送られたのであった。

知子が最初に投げたテープが、二人からひどく離れた場所にとんだのを、涼太が敏捷に駆けついて拾いあげ、慎吾に握らせた光景が、昨日のようにありありと浮んでくる。あれから丁度一カ月がすぎていた。背の高い慎吾と並ぶと、涼太は慎吾の口のあたりまでしかなかった。びったりとよりそった二人の男は、遠目には兄弟か親友のように見える。遠目にも涼太の若さが映った。

船は休みなく進み、二人の男の顔がしだいに明らかに近づいてきた。知子の胸からすべての感情が消え、ただ懐かしさだけ

が熱くたぎりながらほとばしってきた。今、この世でいちばんじぶんを愛してくれている二人の男が、そこでじぶんの上陸を待ちかねているという嬉しさだけが、単純に心をいろいろに染めあげていく。

顔が見えはじめてから岸壁に船がつくまでの意外に長い時間を、足ぶみするような気持で知子は全身のそぶりに想いをこめ、二人の男を見つめていた。その時にはもう、二人とも等分に懐しかった。

上陸して、慎吾の長い指先で頭を軽く、たしかめるように叩かれた時、知子ははじめて声をだして明るく笑った。慎吾の生死を案じつづけてきたこの半月ほどの悶えが、急にこっけいなものに思えた。目の前にいる慎吾も涼太も一カ月前と何の変りもなかった。

慎吾が笑いながらいった。

「昨夜から二人で横浜に泊りこみだ」

「どうして」

知子は二人の顔をあわただしく見くらべた。

「今朝七時に船が着くというんだろ、とてもそんな早く来られたものじゃないよ。昨夜から来て、二人で呑み歩いて、変な温泉マージンみたいな宿で泊ったよ。ねえ」

慎吾にふりかえられて、涼太は三人の時はいつもそうするくせの、ひかえめな態度で目だけで笑ってうなずいた。知子が涼太を見つめると、薄い皮膚に目に立つほど血を上らせながら、凄いなあ、真黒になってといった。それは慎吾にむか

っていったようにも聞えた。

涼太は昔、知子が夫と離婚する原因になった年下の恋人であった。稚純な二人の恋は周囲を傷だらけにした上、夫の予言通り、半年も持ちこたえられず惨めな破局になった。南の島で結婚したと聞く涼太と、知子は十年余りも逢わなかったが、涼太の結婚も失敗して、上京して以来、知子との再会があった。

知子のそばにはすでに慎吾がいた。慎吾は涼太と知子の過去は、はじめから聞かされていたが、じぶんに似てどこか無気力な感じのする、ひかえめな態度のおとなしい男に、最初から好意を示していた。

知子との恋の季節が、あっけないほど短かったわりに、知子の本質を見ぬいている点では、じぶんにつぐ男だなど、知子に話したりしていた。

知子に関しては、八年間のじぶんとの生活の貞淑さから、全く安心しきっていた。

慎吾が妻の家に帰っている時、涼太と知子がしげしげ逢いはじめていることも、知子のあけっぴろげな報告でみんな承知しているつもりであった。知子の報告にいつからか秘密がかくされはじめたのには、一向に気づいていなかった。ものを書く男のくせに、慎吾には人の心の裏を疑ってかかり、かぐつてみるというところが全くなかった。それを知子は慎吾の育ちのよさの鷹揚さだとかばい、涼太は本質的に自分の事しか考えない利己主義のあらわれだときめつけていた。

他人の情事などにはかんのいい慎吾が、不気味なくらい二人の秘密には盲になりつづけていた。

税関の事務で待たされているひまに、涼太の姿が見えなくなった。知子は向うの建物の売店で煙草を買っている涼太の後姿を見つけた。ジュースをのんでくると慎吾につげ、その傍を離れた。

建物のかげで海に向って煙草に火をつけている涼太の横顔には、さっきまでの明るさはなく、知子の見なれた、癩癧の強い感情を押し殺した神経質な昏い表情が滲んでいた。

「あの桃がたべたい」

知子の声に目をあげた涼太の顔に、燈がともったように明るさがういた。口の煙草をすぐ知子にさしだしておいて、身をひるがえして売店の方へかけていった。

掌にあまるような瑞々しい水蜜桃を買ってきた涼太は、知子に渡しながらか、しばらく知子の掌を息をのむようにして押えていた。涼太の心のたかぶりが、知子の掌から軀の芯にながれこんだ。涼太のことを旅の間中、どうしてあれほどきれいに忘れられていたのだろうと、知子は不思議な気がしてきいた。

桃は掌にたつぷりと重く、柔毛につつまれた肌は繊細なやわらかさだった。むくと、あたりに甘い果汁の匂いがゆたかにただよった。夏の日本にいるという感懐が軀のすみずみまでしみわたった。しゃがんで、果汁の音をたててなめらかな果肉に歯をすべりこませながら、知子はかばうようにたたず

んでいる涼太を見上げた。

「おいしい？」

だまっとうなずいて、知子はじぶんが今、甘えた表情になつていてと思った。涼太が吐息をはきだすようにいった。

「生きていてよかったなあ」

「ええ？」

「まるでわからないんだもの、あなたが生きているのか死んでいるのかさっぱり。たまらなかった。不安であんなやりきれないことつてない。今度行くなら、電話の通じる文明国にいつてほしいな」

「だって……いつて来いつてすめたのはあなたじゃない」
「それはそうだけど、一カ月くらい、ぼくらの関係からぬけだしてみたところで、あなたって人は決して変らない人なんだ」

涼太の口調もいうことも、一カ月前と全く変っていないと知子は思った。

「おかしい話だ。あなたの留守中、小杉さんから何度も呼出されてよく二人で酒をのんだ。あなたがなつかしくなると、小杉さんはぼくを相手にするのが一番気が安らぐんだな。全くおかしい話さ。ぼくもあなたがなつかしくてたまらなくなると小杉さんを呼出している」

税関の荷物検査が始まった。あわてて知子は涼太から離れた。

涼太はその日、慎吾に頼まれて、横浜から東京までの車を

友人から借りてきていた。

運転台の涼太のすがすがしいそりたての衿あしをみつめながら、知子は慎吾と後ろのシートにゆられていた。慎吾の体臭と涼太の体臭がせまい車内にまざりあつてこもってきた。沈黙を破るのがじぶんの義務のように、知子はとめどもなく旅の話をしゃべりつづけた。

慎吾と別れなければと気負いこんだ決心は、もうとうに鈍っていた。二人の男の間で右往左往していた出発前の浅ましいじぶんの醜態が、これからまた永久につづくような気がして疲労がどっと感じられてきた。そのくせ、二人の「じぶんの男」に護られているこの小さな車の中がまたとない安息所のように、うつとり心が和んでもいた。

「ほんとうに黒くなりましたね」

涼太が思いだしたように咽喉を鳴らして笑った。

「すぐなおるさ」

慎吾が、かばうようにいった。

涼太と別れ、慎吾と二人で知子の下宿に帰つてくると、畳が新しくなつていた。大家が留守に替えてくれたのだと慎吾がいった。襖も張り替えてあった。

知子の仕事机には、留守中の郵便物や仕事のメモが一目でわかるように整理されていた。慎吾のしたことだった。知子は夫と離婚した後、娘時代女子美術学校で覚えた染色に打ちこみ、どうやら仕事に追われるほどになっていた。

聞かなくても知子の留守中も、慎吾は海辺の妻の家と知子

の部屋を、一週間を二分して、規則正しく電気仕掛けの振りのように往来していたのがわかった。八年間決して変えたことのない慎吾の習慣であった。

来る日も帰る日も、めったなことでは慎吾は予定を狂わせない。どっちの家を出る時も、靴をはきながらひとりごとのように、

「××日に帰る」

という。それが出がけの挨拶であった。何かの都合で予定の狂う時はどっちの女にも、こまめに前もって変更を知らせる。いつのまにか、知子の机の横には慎吾用の仕事机が並び、知子の部屋は、慎吾の『東京の仕事部屋』の役割も果たしていた。

知子はこれまで、慎吾と別れたあとの自分の姿など想像したことなかった。八年の間、ただの一度も、慎吾と妻の別れる場合を空想したり、願ったりしたことがないのと同時に、じぶんが慎吾と別れなければならないと本気で考えてみたこともなかった。それは、慎吾には秘密で、涼太との関係が思わぬ深みにはいりこんでしまっただけでも同様であった。

知子にとってこの一年近い月日、別れなければならないと、背中をあぶられているような気持ちにかりたてられていたのは、慎吾とはなく、むしろ涼太とのことであった。

知子は慎吾に涼太のことが発覚する瞬間を想像すると息が止りそうに怖ろしかった。激情にかられた涼太が、何時、ど

んな形でふいに慎吾にすべてをぶちまけるかもしれないと思うと、涼太から一刻も目が放せないような気がして、いっそずるずる深みにおちこんでいった。

三十でめぐりあった妻のある慎吾に、涼太があらわれるまでの八年間、妻同様の貞潔をたて通していた。心の上でさえ、かりそめの不貞めいたものも働いたことはなかった。

慎吾が海辺の妻の家に帰っている間は、知子はまるで、出張中の夫の留守を守る妻のような身の処し方をしていた。じぶんの判断で何かを取りきめなければならないような時、「宅に相談しまして」

と世間の妻のように口にこそ出していわなかったが、一から十まで慎吾が望み、慎吾が好むような処置を取っていた。

慎吾の留守に一人でした経験のすべてを、慎吾の顔を見るなり息せきぎって告げ、一つのこらず話してしまうと、はじめてそれらの経験がじぶんの中に定着するのを感じた。無口で非社交的で、経済力のない、世間の目からみれば頼りない男の典型のような慎吾に、知子は全身の鍵をあずけきったようなもたれたかただった。

慎吾が知子の部屋に来ている時、かえって知子は安心して外出がちになった。

外から帰ってきた知子は玄関に出迎えてくれる慎吾を見上げた瞬間、やっと帰ってきたという実感をもった。走りこんできた息の弾ませかたのまま、知子はせかせかとハンドバッグや包みを慎吾に押しつける。慎吾が大きな目に包みこむよ

うな微笑をみなぎらせ、低い声で、

「ほら、ほら」

とうながすと、知子は咽喉をくくつと鳴らし、慎吾の横をすりぬける。子供のようににぎやかな足音をたてて、玄関脇のトイレにとびこんでいくのだった。外出先で用をたしたがない癖のある知子は、

「慎の顔をみたたん、全身の緊張がゆるむのよ」と首をすくめてみせた。

慎吾がいるのも忘れたように、一心に彫っていた染色の型紙の上から、ふつと顔をあげると、寝ころんで本を読んでいる慎吾を気ぜわしくふりかえり、

「ねえ、あたし今月、いつ？」

じぶんの生理の日まで慎吾にあずけていた。

知子がどんなにあわてて外出しても、出先で、ハンドバッグの中に、洗いあげ、アイロンのなかったハンカチ二三枚と、たっぶりのちり紙を見出さないことはなかった。小銭入れにはいつでも車代になる銀貨や銅貨が程よく入っていた。買物のレシートや、使用済みのメモのきれっぱしなどは、いつのまにかきれいに消えていた。その中には、ぞんざいな知子よりも慎吾の細かな神経がゆきわたっていた。

慎吾と離れたどこにいても、知子はじぶんの軀に無数の糸がつけられていて、その端はしっかりと慎吾の掌の中に握られていて感じがした。いくぶんの不自由さと、たまには軽い抵抗を感じながらも、知子は人形遣いにあやつられている人

形の、無責任な安心感を持ち、かえってのびのびと、おおらかにふるまえた。

夜になると新しい畳がよく匂った。日向くさいその匂いは寝床のまわりにはかくべつ濃くよんでいた。

「疲れただろう……よく帰ってきたね」

慎吾は胸におしあてている知子の顔を仰むかせ唇をあててきた。知子の涙が、慎吾のやせた肋骨のういた胸をしめらせていた。

この一年ほど知子はよく慎吾の胸の上でこんな泣き方をした。声もたてず、身動きもせず、ひっそりと慎吾の肋を濡らした。いつの時でもじぶんから何かをききだそうとしたことのない慎吾は、だまって知子の髪や裸の背をなでる。性慾のこもらない、ただ優しさだけのこもったそんな愛撫が、知子の心の波をしだいなごめていく。

知子はそんな時、たいてい臉の中に涼太を描いていた。どこの安酒場で酒を呑んでいる涼太、深夜の町をただやみくもにタクシーでかけまわっている涼太、何もない殺風景な下宿でふとんも敷かず、丸太ん棒のようにころがっている涼太、深夜の洗面台のすみでぼそぼそ靴下を洗っている涼太……もしかしたら今、この家のまわりをぐるぐる歩きまわっているかもしれない涼太……そんな惨めな涼太の孤独な姿が、慎吾の胸の中で安らいでいる時、身をきられるような切実な不憫さで知子をゆさぶってくるのだった。涼太と肉慾をわけあっている時以上に、そんな時、知子は涼太に愛を感じてい

た。性慾さえ昇華してしまったような慎吾との夜の時間の、

淨福ともよびたいような安らぎは、決して涼太に理解させることが出来ないし、涼太が理解しようとしてもしないだろうことが、知子にはもどかしい。

いつからか慎吾は知子をいたわって二人の間で性の匂いが薄れていた。この二三年で急に知子の染色の仕事が軌道に乗り、有力なスポンサーがついたり、染色だけでなく、装幀の仕事や室内装飾を頼まれたりするようになって、あまり丈夫ではない知子には過剰な仕事がいづでもおいかぶさっていた。

夜になると、板のように張った背中を見栄も氣どりもなく慎吾にもませて、

「疲れたの……むこうでしてよ」

と慎吾の胸にもぐりこむようにして眠りこんでしまう。

慎吾は知子の部屋で机にしがみついて、売れても売れなくても小説を書きつづける。

銭湯の嫌いな慎吾は、内風呂のない知子のところでは、何日長びいても風呂に入らない。仕事で憔悴し、垢で汚れた慎吾がいくばくかの金を手にすると、妻のところへそっくり運びに帰る。海辺の家から帰ってくる慎吾は、妻の許で風呂に入り、休息し、頬もふつくと出たさわやかな男ぶりになり、情交の匂いさえただよわせている。

抱きよせられて、

「今朝してきたんでしょ」

知子は慎吾の胸をおしながら、

「匂いでわかる」

皮肉や嫉妬でいつているのでもなかった。

そんな知子に慎吾は無理強いせず、知子の部屋にいる時は、年より強いじぶんの慾望はそれとなく処理していた。そういう夜が習慣になった。性が薄れてかえって二人の間には、前にもましてこまやかな愛情が通うような気がしていた。

涼太との秘密を持ってしまうてからは、いっそう知子には慎吾とのプラトニックな愛が稀有なもののように大切に思われてきた。

性の中でしか知子を捕えているという実感と安心の得られない涼太に、知子は淫蕩なほど軀を与えながら、そのことでは慎吾にそれほど罪の意識は感じていない。知子の怯えは不貞の事実ではなく、秘密を持ってしまったという精神的な裏切りが、慎吾に知れることへの怖れであった。

「慎が死んだ夢みて怖かった。罰が当たったと思った。生きていたら別れますって誓いをたてたの」

「何に」

「ヤオロズの神やキリストやオシヤカサマやチミモウリ」

ウよ、あの人にも」
慎吾の妻の名前は二人の間では口に上せなかった。妻の名をいう必要のある時、慎吾は、そこだけをぬいてしゃべったし、知子は「あの人」とか「お宅の人」とかいってすまして